Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

# 「笹川杯全国大学日本知識大会 2014」
# 感 想 文

公益財団法人日本科学協会

業務部 国際交流チーム

# 目　次

合肥学院日本語科 4 年生　王蕾・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
合肥学院日本語科 4 年生　柏栄興・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
合肥学院日本語科 4 年生　胡佳佳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
合肥学院 日本語教師　王重斌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
華中師範大学日本語学科　張佳鳳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
南京工業大学 外国語学院日本語学科 4 年生　周倩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
遼寧師範大学　学生　胡溪楠・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
遼寧師範大学 学生　張夢・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
天津科技大学 学生　周芸池・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
南京大学外国語学院日本語学科 学生　全程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
南京大学外国語学院日本語学科 4 年生　侯玥江・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
南京大学大学院 2 年生　毛黎黎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
南京信息大学 学生　田雪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
南京信息工程大学 学生　韓子強・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
南京信息工程大学 学生　経潇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
大連外国語大学大学院 1 年　陳傑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
南京工業大学 外国語学院日本語学科 4 年生　周倩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
南京工業大学 外国語学院日本語学科 4 年生　謝 倩冰・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
南京工業大学 外国語学院日本語学科 4 年生　向家瑶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
南京航空航天大学 学生　秦皖梅・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
南京航空航天 学生　顧紅娟・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
吉林大学珠海学院日本語研究室教員・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
北京林業大学　学生記者 崔詩雪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

※原文が日本語の声は原文のまま、中国語の声は翻訳して掲載しました。

**合肥学院日本語科４年生　王蕾（原文日本語）**

**体験できて、よかった**

合肥に戻ってもう一週間になりました。今ではこの北京の「旅」を振りかえてみると、まるで夢のようなことで風とともに消えてしまうのです。心には「体験できて、よかった」としか思いません。

七月の半ば、王先生よりうちの学校も今回のクイズ大会に参加できるというニュースを受けまして、興奮して喜びました。

七月の末、学校内の初戦がありました。夏休みの日でしたが、皆さんが熱さをおして家から学校まで集まって、学校内試験を受けました。そして十何人の中で三人が北京にいくことになりました。私がその中のラッキーの一人です。

その日から、私たち三人が四ヶ月の間一緒に戦って、辛かったが楽しい時間を過ごしました。
新学期が始まった後、あっという間に最後の日が来ました。１１月の２１日、王先生とともに四人で合肥から新幹線に乗って北京に到着しました。今時の北京では、銀杏の最盛りでした。

いよいよ本格的な戦いが臨みました。２２日の午後、三人で試合に出てきました。残念ながら、「必須問題」の部分が無事順調でしたが、「早押し問題」の部分で失敗してしまいました。三人とも悔しくてたまらなかったのです。競争というのは、そんなに残酷なことと初めて分かりました。

「頑張っていたのに...」と気落ちて自己を咎めていたとき、王先生が「しっかりしてね。よく頑張っていたと分かっています。全力を尽くせば、後悔はしないじゃないか」と私を慰めてくれました。

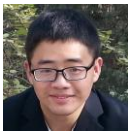
確かにそうです。私が悔しかったけれども、後悔は一度もしませんでした。失敗は苦しみですが、甘えよりも人生に珍しい体験ではないでしょうか。今日からこの四ヶ月を顧みると、その時私がいかにも充実した毎日を送っていたと実感しました。日本に関する知識をたくさん勉強になったことは言うまでもなく、大学卒業を前にして有意義な一筆を添えたのです。

ここにて、どうしても感謝したいひとがたくさんいます。まずは、指導してくれて、最後まで付き合って王先生に感謝の意を表したいです。そして、共に戦って楽しい時間を過ごしたチームメートの二人にありがたいです。今回の大会を参加したのをきっかけに、三人は親しくなったことは大きな収穫だと思います。最後に、こんなすばらしい機会をいただいた日本科学協会、主催の北京大学及び協力していただいた皆様に感謝しております。多くの関係者のお陰で有意義な活動に参加できたことは分かっています。

「体験できて、よかった！」

**合肥学院日本語科４年生　柏栄興（原文日本語）**

**一期一会の縁**



「一期一会」という言葉はずっと前も見たことがあったが、正直に言えば、その本当の意味を理解したのは最近のことだ。それは２０１４年「笹川杯」日本知識大会を参加に準備する時出たもので、少し調べたら、「いちごいちえ」という読み方もおかしいと思う。

百年前の大将井伊直弼はそう解釈した。「人との出会いを一生に一度のものと思い、相手に対し最善を尽くす。」これは私が今回の大会で得られた最大の収穫と言えよう。笹川杯のおかげで普段内向的な私は自分世界の扉をあけた。同じチームの仲間同士との絆もいっそう深めた。試合現場や、泊まるホテルにもできるだけ全国から集まった日本語学習者と話し合ったり、お互いの勉強現状を交流した

り、本当に勉強になった。私は華中科技大学と中南財経大学のある院生と日本語についていろいろを話して、自分の視野も広がった。ひいて北京大学の食堂で笈川幸司先生と一緒にご飯を食べたこともあった。

この笹川杯に出るため、うちのグループはさまざまな準備をしたが、結局、負けた。グループのほかの二人は本当によく頑張ってきた。毎日日本に関してあらゆる事を調べて、覚えてきた。私が担当するのは日本地理や社会面などで、彼女たちの準備は自分より非常に心を込めた。ここで改めて二人に申し訳ないと言いたい。

まもなく卒業する私にとって、今回の笹川杯は大学生涯最後の日本語勝負の舞台かもしれないが、決してこれで日本および日本語とけじめをつけない。今回の大会をきかけとして、知日派となる私たちは中日友好に重大な責任がある。この交流の橋が私たちによりもっとしっかり築かなければならない。自分もこの度に出会ったすべての物事を一生に一度だけの貴重な記憶として深く心に刻んでいく。

**合肥学院日本語科 4 年生　胡佳佳（原文日本語）**

**ありがとう**

今回、北京大学で主催した笹川杯日本知識クイズ大会に参加することができて、本当に感謝している。今も時々大会前後の様々なことについて思わずに思い出す。夏休みから初冬に入るまでずっとその大会が準備していた。最初から、私は合肥学院の学生としてこの大会が参加することができるという知らせを知ってから、絶対に全力を尽くして、今から一秒たりとも無駄にするなと決心した。そして、二人のクラスメートとお互いに促し、それぞれの得意な分野の知識を準備した。一年生の時からずっと日本の文学と歴史への興味を持っている私は、自然に文学と歴史の部分を担当した。「日本の歴史と文学でしょ。絶対問題ない！」とその時の私、そう思っていた。でも、三冊、四冊の本を読んで、歴史上の人物とか、歴史で有名な事件とか、有名な文化人と彼らの生涯などを整理した後、自分のノートで蜘蛛の糸さながらの関係線を見て、本当に何の手がかりもなくて、困っていると感じただけだった。思った以上に何倍、何百倍も難しかった。その一方で、万物の関係は本当に不思議なものだと感心したものもある。こうした緊張したり楽しみを探したりした状態で、クイズに関係しそうな知識をできるかぎり頭に入れた。その知識の勉強がまるで宝のようなものが手に入れるようで、私も毎日たゆまずに疲れても勉強し続けていた。また、日本という国への理解もだんだん深くなってきた。私はただ本を眺めて学ぶのではなく、より全面的に日本を理解できようと信じている。将来は仕事の分野にかかわらず、日中関係の促進に少しても貢献できればいいと考えている。頑張り続けられない時にいつもそう自分自身に励ます。今から振りかえてみれば、その何ヶ月の準備期間で本当に毎日充実な生活を過ごした。今もいい記憶になった。

大会の前夜に三人で整理したノートやプリンタした資料などを最後に復習した。中身はどのページもびっしり文字で埋まり、色々な色や書体で注釈がつけられていたものを見て、心の中でなんとなく感動というか、感謝というか、言葉で表せない気持ちが湧いてきた。日本各地の手描き地図もたくさん盛り込まれていた。それは全部三人で心を込めて作られたもので、何ヶ月をかけて作られたものだ。今回の大会でいい成績を取らなかったとしても、私は今回の大会で三人のグループが完璧に各自の責任を担ったと思っている。学校の王先生のことも、二人のクラスメートも、また、大会の参加者皆さんと開催した皆さんに感謝の気持ちを伝えたいと思う。

最後に、「笹川杯」日本知識クイズ大会がますます発展し、全国の日本語関係催事のトップとなりますよう心からお祈りします。またいつか「笹川杯」で皆さんとお会いできること、そしてより多くの大学の選手に参加してもらえることを期待しております。

**合肥学院 日本語教師　王重斌（原文日本語）**

**日本知識大会との絆**

「笹川杯日本知識大会」は今年になってもう十回目となり、人間に譬えれば、活気のある小学校四年生にあたると思う。「彼女」（笹川杯日本語知識大会）の名前を初めて知ったのは「彼女」が三歳の時だったが、でも残念ながらすれ違った。その翌年、恵まれた私は「彼女」と手を繋ぐことができた。つまり 2007 年の華東地域大会に参加できて、そして最後に優勝団体として日本へ遊学できるということだ。その時の笑い、涙、感動、見聞など、ずっと大切にしてきて、美しく生き生きした思い出になったのだ。

あれからもっと自信になった私は無事卒業し、今の日本語教師の仕事を見つけた。時々学生たちに「彼女」との出会いなどを喋ったりもして、羨ましい表情を見せてくれた。彼達にもこんな有意義な活動に参加してもらいたかったのだ。去年の 5 月こんなチャンスがやってきた。今年も日本科学協会の顧先生のおかげで、もう一度参加できた。「やっぱり彼女とは縁があるな」と感じた。

さて、七月中旬から学校内の選抜を行い、何十名の応募者から最も優秀な学生 3 名を選んで、さまざまな日本に関する本を渡した。それから選手たち自分で独学し始め、こちらからも時々指導してあげた。普段の授業で日本についての知識を教えることもあるが、体系的ではなく、今度の知識大会の準備のおかげで、学生も日本のさまざまな関連知識を吸収することに積極的に取り組んでいた。

いよいよ大会が行われる日になった。私は学生 3 人を引率して、北京への旅に出た。新幹線の車内で同行の他大学の先生と選手たちにも会った。「旅は道連れ」と言われた通り、互いに話し合ったり、交流したりして、楽しい時間を過ごした。11 月 22 日、知識大会は正式的に開催し、我が校は午後の試合に参加した。結果はどうであれ、選手みんなは頑張ってきた。確かに励んでくれた吉田さんが言われたように、努力する過程に宝があり、将来きっとピカピカするだろう。重要なのはこれからである。

全国 89 校から優秀な日本語学習者が 300 名近く北京大学に集まり、こんな盛大な大会を催すにはきっとたくさんの努力と協力も要るに違いない。関係者のみなさんに心からの敬意を表したい。みんなの力合わせによって、「彼女」はもうこんな立派なものに成長してきた。これからもっと成熟になると信じている。

こういう民間レベルでの文化交流は必ず両国の明るい未来に大いに役立つから、永く続くように願っている。

**華中師範大学日本語学科　張佳鳳（原文中国語）**

**質素な時間の中の静かな開放**

ノートに挟んだイチョウの押し葉は、北京での午後に暖かい秋の日差しの中で記念に拾ったものです。見渡す限り、アンズのような明るい黄色が、日光の下で金のようにきらきらしていたのがとても気に入って。秋風の中で降りしきる姿は、しなやかで、上品で、見ていると大会の準備で緊張している心が落ち着きました。今回 2014 年の笹川杯大学生日本知識クイズ全国大会で個人戦 3 位を獲得できたのは、この美しい秋の景色に感謝すべきなのかもしれません。心は感謝感激でいっぱいですが、このすばらしい経験をあっさりと文字にまとめてしまうことをお許しください。

ひっそりと強気になったり卑屈になったりしながらやってきましたが、実のところあまり自信はありませんでした。ですが振り返ってみると「まめにやっていれば天の報いがある」と次第に分かってきて、この機会をくれた恩師にも心一杯の感激と感謝を覚えるばかりです。大学で 3 年何を習ったか尋ねられるとしばらく言葉につまり、大会参加前にも消極的で、果たして自分が大学代表として参加する覚悟が

あるのかなどと考えていました。しかしクイズが始まってみると意外にもこれまでの積み重ねが本当に役に立つこと、先生の再三の教えは印象深く覚えておりしかも使い道があることに気付いたのです。自分の感触は 4 つのキーワードでまとめられると思います。

**キーワード 1　積み重ね**

1 年次で「日々の積み重ね」という日本語を習いましたが、大会後に改めて積み重ねの大切さを感じています。意識して学ぶことも無意識に聞くことも含め積み重ねは大切です。知識クイズ大会の準備は 1 日や 2 日ではできません。大事なのは普段からの積み重ねで、できる限り多くの分野を学び知ることです。

この点で特に感謝したいのは外国人教師の石橋一紀先生です。先生はいつもとても謙虚に自分が教室で口にしたのはどれも「無駄話」だとおっしゃっていましたが、博学な先生はできるだけ受講生の視野と考える深さを広げようと、どんな分野でも一言の説明をくださいました。最も貴重な教えは国籍、政治、偏見を投げ捨てて客観的に考える姿勢です。印象に残っているのは、先生は中国の試験志向の教育が嫌いなので自分の授業は試験対策を優先しないとおっしゃっていたことです。先生の目的は私達に本当の意味で知識を覚えさせることであって、苦しい時の神頼みではなくなった後にすべて忘れてしまうような知識ではなく、先生の試験も常に私達の個人的な考え方や見方を見るものでした。先生の教育理念はすばらしいと思うので、先生の講義は一言一句も聞き落とさないように真剣に聞きました。たとえ何度目かになる内容だとしても、いわゆる「無駄話」だとしても。毎回 100%理解して把握したとは言えませんが、本当に学びになるところはありました。

先生の「無駄話」のおかげで無意識にさまざまな分野の知識をつかむことができ、しかも楽しみながら学習できたことは事実が証明しています。自分に丸暗記を強制したものだったら長く覚えておく効果はありえませんでした。大学の日本語学習では、普段から先生方が毎日の講義前に最新のニュースや情報を共有してくださるので、いつの間にか視野を広げることができていました。この普段の習慣が私にとって最適な定着と積み重ねだというように考えると、今回の栄誉は本当に先生方のおかげです。

**キーワード 2　興味**

孔子の言葉に「知るは好むにしかず、好むは楽しむにしかず」というものがあります。これには心から賛同し、また強い実感もあります。もし日本が好きでなければ恐らく大会に興味を持つこともなく準備の苦労もしなかったでしょうし、勿論この栄誉を手にすることもありませんでした。

大学に入って初めて、それまで学習経験のない日本語にふれるのは、アニメも見ず日本に対する知識も少ない人にとっては間違いなくかなり不安なものです。私自身も最初は今ほど日本語に熱中していませんでした。ですが幸い投げ出すこともなく、よく分からないときでも努力して上達することは忘れませんでした。いつから日本語が好きになったのか、日本が好きになったのかははっきりと覚えていませんが、日本に対するあこがれと愛情が日に日に増していることは確信できます。

日本語について最初に興味を持ったのが日本文学でなかったことは恥ずかしいのですが、きっかけはそれほど重要ではないと思います。重要なのは今こうして日本語を学び日本語に強く引きつけられていることです。初め日本のアーティストが好きでテレビ番組をたくさん見ていたら、だんだんと日本が好きになってきて、関心のある分野も広がってきました。実は気付かないうちに知識の面でもかなり広がっていたのだと思います。もしかすると、関係するものが何でも好きになってしまう気持ちが、自分の好む、楽しんで学べるものを見つけられることにつながったのかと思うと、何という幸運でしょうか。

他にも敬愛する李俄憲先生のお力は欠かせません。いつも講義では日本を理性的に判断して理解するようにと教えてくださったおかげで、日本への尊敬と好きな気持ちを日増しに高めるだけでなく、理性的に客観的に物事を捉える姿勢も身についたのです。1 年次 2 年次にはよく先生の噂を耳にしました。学生に厳しい先生だとか凶悪だとか、噂は長く聞いているとどうしても本当だと信じてしまいます。しかし事実はそうではありませんでした。3 年次でいざ本当に李先生の講義を受ける機会があり、何回か受講

するうち、学生に対する先生の良心や苦心がだんだん分かるようになってきました。まさに先生が日本語でおっしゃった「老婆心ながらも、諸君に何でも教えたいです」という通りなのです。先生の「親心」には感動し、また数十年にもなる先生の文学の教養にも敬服しました。噂がどこから出たものかは知りませんが、先生と接触さえすればきっと先生の配慮を理解して感謝でき、その博学さに敬服するはずだと思います。いつも一見すると気の向くまま進められているような講座ですが、毎回「国と人のために心を砕く」感性にはとても感慨を覚えます。毎回、先生が共有してくださる日本の見聞は、日本に行ったことがない私にとって感慨深く、自分の日本に対する興味と好感も自然と深まります。先生の講義では日本に対する認識を深めるだけでなく、多くの人生の道理を悟ることもできるのです。

**キーワード 3　感動**

今回の大会に参加した過程で、他チームの選手と競い合う中から得られたものが多いだけではなく、心に刻まれた感動も確実にたくさんあります。とりわけ印象深いのは、日本財団の尾形武寿理事長による閉幕式での挨拶です。

尾形理事長は間もなく 70 歳というお歳ながら、青年の心と大志で引き続き仕事に貢献し、中日の民間友好交流活動に貢献したいとおっしゃっていました。確かに 70 の年寄りという感じは少しも受けず、その仕事への姿勢に感動し、その大志に励まされました。勉強する段階にいる若い学生がいつか中日交流業務の第一線で幹部になれるようにという期待が理事長と来賓の皆さんの願望ですが、私も心から自分自身、自分達の世代が期待に背かず、理事長の意気込みと決心に負けないで、絶えず勇敢に前進し努力することを望んでいます。

理事長は、こうした学生向けイベントに注力し続ける理由に言及されたとき、若い大学生は新しい事物を受け入れるのに最適な年齢層であり、こうした大会イベントを通じて、学生たちの日本に対する全面的で客観的な理解を促し、教科書、映像作品、報道によって作られた「日本のイメージ」という固定観念から脱却してほしいと述べられました。確かに、言語は鏡に似て、ある民族の文化が含むものを示しています。日本語の学習中は絶えず日本の独特な文化を経験していると同時に、日本文化と接触する中から、文化の理解をベースにしないと本当の意味で言語を学ぶことはできないと徐々に分かってきました。日本語に触れる前の日本にたいする認識は本当に一面的で視野の狭いものだったことは否定できません。日本語に触れる中でゆっくりと文化も理解できてから、敬慕の念と好感がより増しました。私自身を通じて人々の固定観念を変え、理性的に日本を判断し理解してもらえるようになればという希望もあります。

中日関係の起伏に富んでいる中でも日本財団や関連団体がたゆまず努力を続け、中日の友好交流のために作り出した貢献に感動し、長い間で中日友好のために黙々と自分の青春を捧げてきた人々にも感動しました。

**キーワード 4　感謝**

今回 2014 年の笹川杯大学生日本知識クイズ全国大会で個人戦 3 位を獲得できて最も強く感じたのは感謝の気持ちです。

中日関係は楽観を許さない状態で、よく親戚や友達に敏感な問題を聞かれることもありますが、文化交流と学習には「色眼鏡」をかけるべきでないと信じています。これほど多くの人がなお両国関係の改善に努力し続けていることに感謝しています。このような背景のもとで幅広い日本語学習者のため日本の言語と文化の知識の学ぶプラットフォームを築き、学習の中で成長させてくれて、日本に対する理解を深め、日本語学習のやる気をかきたててくれた皆さんありがとうございます。知識クイズ大会は単に選手の蓄えた知識を試す場ではありません。より重要なのは私達が知識の蓄積と文化の理解を通じて自分の独特な人格、気質、道徳や考え方を形成できることが期待されているのではと思います。

自己表現の舞台を提供してくださった主催者、賛助者の皆さんに、私を信じて参加のチャンスをくださった先生に、一心に指導する先生方に、サポートして励ましてくれたクラスメイトとチームメイトの

みんなに、バックで支えてくれた家族に感謝しています。家族や先生に自分を誇りと思ってもらえることが本当に一番感謝できたことです。自信を持たせてくれてもっと良い自分になるためいっそう努力するきっかけをくれたこの大会に、そしてまだまだ成長の余地や努力の必要なところを見つけさせてくれたこの大会に感謝しています。質素な時間の中で静かに開放され、光り輝けたことにも。

「夜深風竹　秋韵を敲し、万葉千声みなこれ恨なり」という詩があるように、秋はいつも寂しくて索漠としていますが、イチョウの別れは自由かつ上品で気高く生き生きとしています。人生も同じように、いつでも最大の力を出し、最も優雅な姿を見せ最も美しい姿を「開放」するよう努力すべきです。今回の栄誉を私が前進し続ける力に変えて、質素な時間の中で蓄積、成長し、光を放ちたいと思います。

**南京工業大学 外国語学院日本語学科 4 年生　周倩（原文日本語）**

10 月中旬うちの大学で行われた第一回日本知識クイズ大会の司会者を担当したきっかけで、日本に関しての知識が色々分かった。十分の準備が必要だと思っている。

北京に着いてから今度の参加者が非常に多いことが分かり、実に心細かった。でも、もう決まっているから私たちも頑張らないといけない。

予備戦は明日（22 日）の午前にすることはくじ引きしてから分かった。第三組だった。第三組なので、前の選手たちの結果、状況を知り、私たちにとって参考にすることができる。必須問題なら、できるだけ全部の問題を正しく答える必要がある。一問や二問間違っても焦らないことが大切だ。必須問題が終わると、早押し問題に入った。今度北京大学でのクイズ大会は早押しの機械が使われ、いいタイミングで押さないといけない。そのため、どうやって押せばいいかは知っておいたほうがよい。簡単で自分が正しく答えられる質問でも冷静に対応しなければならない。そのタイミングより早く押すと減点されることはよくある。

事前の準備が重要だ。日本人の先生が毎週補修してくださったおかげで、いろいろ分かるようになった。それだけではなく、具体的な質問の答えのほかに、選択肢も調べたほうがいい。補修が終わってからも復習する必要がある。

次に、協同が必要だ。私たち三人はそれぞれ得意な分野があり、協同して答えることが役に立つ。今度雑学の部分は難しく感じられた。

自信を持つことも大切だ。競争相手はうちの大学より有名な大学でも、自信をもって頑張ってください。色々準備したので、自分を信じることが重要だ。

質問をよく読む必要がある。クイズ大会はただ知識を考察することではなく、冷静で真剣に対応する態度も忘れてはならない。「東京では、人々はどちらを空けて立ちますか？」という問題がある。我々は多分すぐどちらに立つことが分かると思いますが、どちらを空けることではなく、「左」か「右」か間違ってしまう結果になる。簡単な質問であるほど用心深く注意することが重要だ。

日々の勉強を重視しないといけない。ある言語を習うにはその文化も学ばなければならない。今度のクイズ大会もそうだが、ほかの方式を通してもよい。ニュースを聞いたり、ドラマを見たりするのもお勧めだ。

勉強するとともに考えることも重要だ。考えたら調べたいものがあると思い、卒論を書くときに、使えるアイディアが湧いてくるかもしれない。

今回はこんないい成績が収められるとは思わなかった。日本に見学に行くことができ、実にうれしい。

**遼寧師範大学 学生　胡溪楠（原文日本語）**

「笹川杯全国大学日本知識大会 2014」が、12 月 22 日～23 日に北京大学で行われた。大学に入って以来、全学を代表して試合に参加したことが一度もなかった私は、今年遼寧師範大学を代表として、2014

年の笹川杯に参加して、光栄であった。準備する間、よりよく日本を理解する機会を得て、とても勉強になった。

笹川杯は私にとって初めての幸運な体験でした。優秀賞だけを手に入ったけれども、授業の中では学べないいろいろな知識を受けた。自分は沢山知らない知識があるから、もっともっと努力するべきだ。最後に、日本財団、日本科学協会と北京大学の皆方に感謝したいです。

**遼寧師範大学 学生　張夢（原文日本語）**

笹川杯に参加する機会を与えてくださった大学に本当に感謝したいです。今度の旅は今までの大学生活での一番幸せな体験です。二年生の私にとって、勉強すべきものはまだまだいっぱいあります。そんな立派な先輩たちを見てから勉強する気もいっぱいに出てきました。日本の文学だけでなく、政治、地理、文化などの数え切れない知識を身につけなければなりません。決勝戦での問題のなかで、答えられるのはいくつかあります、答えられない問題でもその答えをきちんと覚えました、要するに、いい勉強になりました。

今度のコンテストの形も多種多様です。早押しの部分は反応が早すぎて減点は２０点もありました、悔しくてたまりません。でも、早押しという部分は好きです。刺激で体験したことがないものです。今では、早押しの手際をよく覚えたと思います。

コンテストの優勝を取った先輩たちに羨ましい感じがいっぱいです。日本へ訪問することができて本当に良いですね。日本へ行って、本場の日本の雰囲気も感じられれば、生の日本語も話せます。今度のコンテストではいい成績が取られませんでしたが、いまからの一年間の間に、精一杯日本語を勉強することにしました。自分の努力を通して来年の笹川杯もう一度参加したいと思います。その時、自分の勉強の成果を思いっきり発揮しようと思います。

**天津科技大学 学生　周芸池（原文中国語）**

笹川杯大学生日本知識クイズ全国大会に参加して、自分には収穫がたくさんありました。とても貴重な経験で、深い意味があると思っています。

笹川杯は中国全土の日本語を学んでいる大学生が集まって競技する機会を提供することで、より広い視野から自分の日本語レベルと日本に関する知識の把握度を理解させてくれます。笹川杯の出題範囲はとても広く、日本の政治、歴史、地理に関するものから、スポーツやアニメといったエンターテインメント性のある問題まであります。このバラエティは、日本語を学んでいる大学生が教科書の枠に止まらず知識の幅を広げ、日本を全面的に理解してくれるようにという笹川杯の目的の一つを反映したものですね。

最も印象に残っているのは東華大学の個人戦の選手で、今年の笹川杯個人チャンピオンにもなった彼女の回答ぶりは非常にすばらしいものでした。早押しクイズは豊富な知識を持っておくだけでなく、平常心と敏捷な動作も求められます。彼女はその両方を兼ね備えていたので、何度も自分で解答する機会を勝ち取って点数をはるかに稼ぐことができたのでしょう。彼女の姿に心持ちを調整する重要さを見ました。何事にも落ち着いて向き合うことが大事なのだと。

我がチームは最終的に決勝進出できませんでしたが、予選での活躍、特にチームワークの面では、自分たち自身も引率の楊先生も非常に満足しています。勝負そのものが肝要なのではなく、大会に参加することと自ら努力することが一番大事で、こうした体験ができただけでも十分です。

**南京大学 学生　全程（原文日本語）**

　将棋用語に「勝って偶然、負けて当然」という言葉がある。何かを始める時には、「失敗しても当たり前だ」という心構えで、腹をくくって前進するのだ。就活の最中に学校の代表に選ばれて、全国大学生日本知識大会に参加することになった私は全力を尽くしたが、個人戦の PK 戦で負け、ベスト 6 に進出できなかった。

　それでも、知識大会に参加してよかった。日本知識大会を通じて、自分は何を得たかについて、私は考えている。

　まずは、優秀な選手との出会いだ。全国 88 校の選手と一堂に集まり、正々堂々に競い合うこと自体、自分にとってはいい経験になった。人の上には人があり、自分よりも優れている学生たちとの出会いにより、自分の不足しているところを補い、さらに強くする原動力にもなる。

　それから、日本語専攻の学生としては将来どのような人材になるべきかについても考えていた。某会社の人事と面談したとき、ほとんど日本語専攻の学生は言語以外に専門的が知識を持っていないと言われたこともある。しかし、中国と日本の協力がさらに深まるにしたがい、相手の国をよく「知る」人材に対する需要もさらに拡大していくとのことである。木寺大使がおっしゃったとおりである。四年間語学を中心として勉強してきたが、日本語が話せるだけではなく、日本の文化・社会をさらに深く知り、高レベルのコミュニケーション能力を身につけた人こそ、中国と日本の間の架け橋としての役割を果たすかけがえのない人材になれる。

　二日間の短い時間だったが、自分の視野を広げてくれ、そして自分の将来似ついていろいろ考えさせられた日本知識大会に感謝したい。

**南京大学外国語学院日本語学科 4 年生　侯玥江（原文日本語）**

　楽しい経験でした。

　知識大会に準備するうちに、日本についての豆知識をいろいろ覚えてきて、気がついたら日本のことをもっと好きになりました。

　大会に参加するチームは 89 もあって、大会を見ながら、同じく日本を勉強して優秀な人がこんなに多いのかと感心して、自分もしっかり頑張らないとと思うようになりました。

　勝つときの楽しさや負けたときの悔しさなどを味わって、とてもいい勉強になりました。

　感謝の意を申しあげます。

**南京大学大学院 2 年　毛黎黎（原文日本語）**

　今年の９月に、自分が笹川杯日本知識大会に出る選手として選ばれたことを先生から聞きました。しかし、正直に言えば、最初の時、「私で本当にいいのか」と思い、大会に出るべきかどうか非常に迷いました。11 月のスケジュールはもうギッシリですし、ほかにやらなければいけないこともいろいろとありますので、万全な準備で大会に出ることは私に本当にできるのかと非常に不安でした。しかし、いろいろ考えた後、やはり私にとって今回の大会はとてもありがたいチャンスだと思いますので、大会に出ることを決めました。そして、今は「大会に出て本当に良かった」と思っています。

　今回の大会を通じて、私は今まで気付かなかったことに気づくようになりました。例えば、大会の準備をしていた時に、「日本の十円玉に描かれた建物の名前は何でしょうか」というクイズが出ました。実はこの前、私は日本に行ったことがありますので、十円玉のコインを何回も使ったことがありますが、しかし、十円玉をしっかり見たことは一度もありませんでした。そして、そのクイズを見た時に、私の財布の中にちょうど日本の十円玉が入っていました。慌てて十円玉を財布から取り出して、その表を見

ましたら、確かにある建物がそこに描かれていたのです。そして、インタネットで少し調べてみたら、その建物の名前は「平等院鳳凰堂」だとようやく分かりました。なんと皮肉なことでしょう。その十円玉はずっと財布の中に入っていたのに、私はそれについて何も分かりませんでした、いいえ、より正確に言えば、私は自分が十円玉のことをよく知っていたつもりで、しかし、本当は何も知りませんでした。それは無知というよりも、傲慢といったほうが正確でしょう。それに気づいた瞬間、私は突然抑えられない不安に陥ってしまいました。今まで、日本に関して私は一体どれだけのものを見過ごしてしまったのでしょうか。今まで自分に常識として一般化されたものの素顔は私が本当に知っているのでしょうか。そのように思いますと、なんだか情けなくなりました。

日本語学科の学生として、私は普通の中国人より日本のことをずっと知っているつもりでした。しかし、そのためでしょうか、私は勉強しているうちについ傲慢になってしまいました。先入観で日本の物事を決めつけ、自分の見たい、必要とされることだけに目を向け、日本の何を見ても、それはとっくに知っているものだと思うようになりました。考えてみましたら、それはもしかしたら、日本語学科の学生だからこそ、犯しやすい誤ちなのではないでしょうか。そして、無知よりも、そのような傲慢の方がより危ないと思います。

今回の大会を通じて、私は無知で傲慢な自分がいることにようやく気づきました。そして、日本のことに関してもっともっと知りたくなりました。そのため、今回の大会に出るチャンスを与えてくれたことに対し、ここで謹んで感謝の気持ちを申し上げます。

**南京信息大学 学生　田雪（原文日本語）**

２０１４年１１月２１日、楊先生と先輩たちと一緒に北京へ笹川杯日本知識大会を参加しに行った。残念なことに、決勝戦に入らなかったが、とてもいい勉強になったと思う。各大学から集まる優秀の選手たちのおかげで、すばらしい競争を見せていただいただけでなく、日本に関する知識も広げてくださった。来場された先生の方々の説明もご丁寧だった。

この笹川杯の目指すところは中国の学生たちにリアルな日本をわかってほしいのだと、日本財団理事長尾形武寿さんと閉幕式にご出席になったゲストの皆様の共同願いだ。その学生たちに中日関係における問題の解決方法を見つけてほしいと尾形さんはこう発言された。日本語を学習するというのはただ言葉を身につけることではない。日本を客観的に理解し、中日関係を推し進めるべきなのだ。私はこれからもがんばって、その架け橋になればいいと思う。

**南京信息工程大学　韓子強（原文日本語）**

今回の笹川杯知識大会を参加させていただき、誠に光栄だと思える。

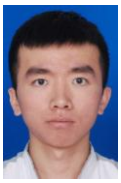
今年、自分は四年生になり、日本との繋がりも強くなった。就職活動が迫られた今、余裕に日本文化を楽しむどころか、専門知識に頭を搾るにも精一杯なのだ。参加の知らせが耳にした時、自分をそんな能力があるかなと彷徨って、やるしかない、何とかなると決意した。北京に到着後、試合が始まった。二日の競い合いを渡って、大会は終わりを迎えた。私のチームは予選で一度トップになったが、残念ながら、最後のミスにより、目の前の好機が逃がされた。まぁ、結果はともあれ、自分はがんばったという事実が残された。今大会を参加することにより、自分の専門知識はまだまだ足りていないと痛感した。

今回の大会を通じで、私は沢山の知識を身に付け，この有意義な二日間はもう一生にも忘れられない思い出となり、人生の宝物になった。

**南京信息工程大学　経潇（原文日本語）**

今回、「笹川杯」日本知識大会に参加できたのは私にとって幸いなことでした。受賞をもらいませんでしたが、中国で一番有名な大学で、全国からの日本語を勉強する学生と戦い合ったのもすばらしい経験でした。「笹川杯」は中国人に日本をもっと知るチャンスを提供し、学生を日本語だけでなく、日本文化や歴史などにも目を注がせました。中日友好に役立てる大会だと思います。

**大連外国語大学大学院１年　陳傑（原文日本語）**



今年の笹川杯日本語知識大会が終わりました。全国からの８９校の大学からの選手たちはこのすばらしいコンクールに参加しました。選抜試合のルールは６組に分けられたチームは一組ずつ３回対決し、１回の対決には５チーム参加するとのことです。初戦を突破する６チームは決勝戦に進入するということです。

メンバーの張さんと楊さんと一緒に半年前からこのコンクールに参加するために手分けして準備し始めました。張さんはアニメや文学分野の内容を担当し、楊さんは文化、政治と経済、僕は歴史と地理分野の内容を担当します。ずいぶん辛い半年でしたが、私たちはあきらめることはありません。こういう困難を乗り越えてきたこそ、私たちは自信満々な姿をみんなに見せることができます。そして、最後は２２５点の超高点数で最初の試合で優勝しました。

残念なことに、決勝戦に進入できなかったです。ルールによって、一組には点数が一番高いチームしか決勝戦に進入できないので、２３０点を取った洛陽外国語学院は決勝戦へのチケットを手に入れまして、そして、今回のコンクールの最後の勝者になりました。

決勝戦をみたとき、納得できないというか、悔しいというか、気持ちが複雑でした。もう少し、もう少しなら、僕はあのステージに立たれると思ったら、より悔しくなりました。しかし、人生はすべて思うように進んでいくというわけではありません。負けたのは負けた、あくまでも勝者に負けたというように思ったら、それほど悔しくなくなりました。

とりあえず、今回のコンクールは円満に閉幕しました。今回のコンクールを通じて、日本文化への理解を深めると同時に、自分の準備不足のところがわかるようになりました。このようなすばらしいコンクールがもっと開かれるならいいと思います。いつか、僕は勝者になれると信じています。

**南京工業大学 外国語学院日本語学科 4 年生　周倩（原文日本語）**

10 月中旬うちの大学で行われた第一回日本知識クイズ大会の司会者を担当したきっかけで、日本に関しての知識が色々分かった。十分の準備が必要だと思っている。

北京に着いてから今度の参加者が非常に多いことが分かり、実に心細かった。でも、もう決まっているから私たちも頑張らないといけない。

予備戦は明日（22 日）の午前にすることはくじ引きしてから分かった。第三組だった。第三組なので、前の選手たちの結果、状況を知り、私たちにとって参考にすることができる。必須問題なら、できるだけ全部の問題を正しく答える必要がある。一問や二問間違っても焦らないことが大切だ。必須問題が終わると、早押し問題に入った。今度北京大学でのクイズ大会は早押しの機械が使われ、いいタイミングで押さないといけない。そのため、どうやって押せばいいかは知っておいたほうがよい。簡単で自分が正しく答えられる質問でも冷静に対応しなければならない。そのタイミングより早く押すと減点されることはよくある。

事前の準備が重要だ。日本人の先生が毎週補修してくださったおかげで、いろいろ分かるようになっ

た。それだけではなく、具体的な質問の答えのほかに、選択肢も調べたほうがいい。補修が終わってからも復習する必要がある。

次に、協同が必要だ。私たち三人はそれぞれ得意な分野があり、協同して答えることが役に立つ。今度雑学の部分は難しく感じられた。

自信を持つことも大切だ。競争相手はうちの大学より有名な大学でも、自信をもって頑張ってください。色々準備したので、自分を信じることが重要だ。

質問をよく読む必要がある。クイズ大会はただ知識を考察することではなく、冷静で真剣に対応する態度も忘れてはならない。「東京では、人々はどちらを空けて立ちますか？」という問題がある。我々は多分すぐどちらに立つことが分かると思いますが、どちらを空けることではなく、「左」か「右」か間違ってしまう結果になる。簡単な質問であるほど用心深く注意することが重要だ。

日々の勉強を重視しないといけない。ある言語を習うにはその文化も学ばなければならない。今度のクイズ大会もそうだが、ほかの方式を通してもよい。ニュースを聞いたり、ドラマを見たりするのもお勧めだ。

勉強するとともに考えることも重要だ。考えたら調べたいものがあると思い、卒論を書くときに、使えるアイディアが湧いてくるかもしれない。

今回はこんないい成績が収められるとは思わなかった。日本に見学に行くことができ、実にうれしい。

以上は私の感想文である。

**南京工業大学 外国語学院日本語学科 4 年生　謝 倩冰（原文日本語）**

今回の大会は笹川杯の歴史上でもっとも大きな大会なので、参加したチームが多いだけではなく、中には強いチームも少なくない。全試合を通して、「強そうに見えるチームは本当に強いとはいえない。自分自身を信じろ」という言葉をしみじみと感じていた。運がよいのはもちろんあったが、試合の前にいろいろな知識をじっくりと覚え、試合の時にあせらずに冷静に判断したことが、成功につながったと思っている。

出題の形式から見ると、今回出た問題はほとんど選択という形（個人の決勝戦のみに選択なし問題がある）なので、正解率が相対的に高まるでしょう。

〇・×問題には、一見すれば相当簡単な問題には、きっとわながあるでしょう。すごく易しい問題があったら、興奮せずに、ゆっくりと問題を読んだ後、判断したほうがいいと思う。例えば：

現在の千円札に印刷されているのは遺伝学者の野口英世の肖像である。（〇・×）

日本の歴史上では始めてノーベル賞を受賞したのは化学者湯川秀樹である。（〇・×）

＊以上の 2 つの問題の元問題をはっきり覚えていないので、意味は大体同じである

以上の 2 つの問題、さっと見れば、「千円札—野口英世」、「初めてのノーベル賞—湯川秀樹」なので、〇にするのは当然であるが、もっとじっくりと読めば、「遺伝学者—野口英世」と「化学者—湯川秀樹」は間違いである。実は、本当に細かいところは間違っていて、しかも、違う部分にもし気をつけたらすぐ見通されるから、以上のような簡単すぎる問題と出会ったら、わなにかからないように、気をつけましょう。

出題範囲から見れば、今回は文学や体育、政治、歴史、社会、地理、アニメ、音楽などの分野が含まれている。

1　文学の分野は範囲が幅広くて、よく考察される。例えば、一つの作品を出して、その作品のあらすじを選ぶことや、原文の一段落を取り出してこれはどこの作品からかを選ぶことなどは、よく考察される。文学に関する知識は、普段からしっかりと身につけるべきである。試合の前に、何冊かの日本の文学の本を抱え、苦しい時の神頼みをしたら、何の効果もないと思う。試合の時、必ず緊

張するに違いないので、問題がスクリーンに映されたとき、もし問題が長かったら、頭が混乱するかもしれない。試合の前に見たことがあるのに、問題を読んだら頭が真っ白になって全然答えられない状況は少なくない。だから、普段の授業で、先生が教えてくれた知識をしっかりと覚え、興味ある作家や文学作品を探し、よかったら日本語版を読んだほうがいいと思う。それに、作品のあらすじに関して、YAHOO で探せばいい（もちろんこれも日本語版で）。もう一つの方法は、ある作家とそのスタイルを詳しく知ったら、たとえこの作品を読んでいなくても、その作品のスタイルをさっと読んで、誰の作品がすぐわかるでしょう。

2　体育に関する問題もよく出る。予備選の時に、体育の問題は連続的に出てきた。体育の中で、相撲や空手、サッカー、野球がよく出る問題である。

3　また、音楽に関する問題も数多くある。音楽の問題なら、中国語版と日本語版の両方ある曲はよく考察される。それに、ほとんどは世間に知れ渡っている曲である。今回では、SMAP についての問題はよく出たが、次回は多分嵐や AKB48 に関することが問題になるかもしれない。

以上は出題範囲のことである。

試合の前の準備といえば、もっとも重要なのは、これまでの各回の試合問題を読むことだと思っている。前回に出た問題をそのまま出す可能性も高い。

試合の時には、緊張せずに、限られた時間の中で、ゆっくりと答えたらいい。それに自信を持ち、チームメンバーを信じて、完璧なチームワークするのは大切だと思う。また、あきらめずに最後まで頑張り続けるのは、今回の試合で、私たちのチームが賞をもらったコツでしょう。

**南京工業大学 外国語学院日本語学科 4 年生　向家瑶（原文日本語）**

去る 11 月 23 日、北京での笹川杯日本知識クイズ大会で「団体戦、第 3 位」という成績を納める事が出来ました。これも、偏に日頃からの先生方のご指導のお陰であります。改めて厚く御礼申し上げます。今大会を通して得た経験は以下の通りであります。

１、今回の知識クイズ大会の参加者は８９校から延べ３００人余りの人数に達しました。会場の運営は実に整然と行われていたのが印象に残りました。北京大学、清華大学などの名門校の学生達を前にして、「私にできるだろうか？」と弱気になりかけましたが、他の学生達も人間なのだから「自分が怖い時は、相手も怖い」はずであると、実力を発揮することのみに集中しようと考え直しました。

２、コンテストの出題問題は様々な分野に及びました。日本の政治、経済、歴史、地理、文学はもちろん、アニメやドラマなどのサブカルチャーの出題が多い点は特筆すべきと言えます。対策としては、団体戦のメンバー3 人がそれぞれの分野に得意分野を持っている事が望まれます。その上で、「広く・浅い知識」を各自が補い合い、アウトプットできるように訓練する必要があります。

3、今大会「団体戦第 3 位」の成績を納める事が出来たのはに入ったのは、正に『3 人の絶妙なバランス』が機能した結果であると言えます。「幅の広い知識力」、「機に発し感に敏なる対応力」、そして「チームワーク」の全てが上手く機能しました。私の最も重要な責務は、この経験を次に伝える事です。今回我々が勝ち得た栄光と感動を、後輩の皆さんに伝える事により、我が校の更なる飛躍に繋げる必要があります。その為にも、日本財団様による「日本周遊」を精一杯楽しんできます。今回は誠にありがとうございました。今後とも宜しくご指導ください。

**南京航空航天大学 学生　秦皖梅（原文日本語）**

この日曜日われわれ一行は二日も続いた笹川杯全国高校日本知識大会の戦いを終えて帰りました。こ

の試合で、私の心に最も深い印象を残したもの、それは、「知識は非常に魅力的なものである」ということです。

残念ながら、私たちは決勝戦まで勝ち抜けませんでした。この結果には、少しだけ運の要素も存在しているのですが、やはり私たちの知識量が足りないのが負けた主因となります。普段は「日本語」について頑張って勉強してきましたが、「日本」に対しての理解は優勝した選手とは比べ物になりません。日本語専門の学生として、日本語という言語自体を身につけるのは本分ですが、それだけにとどまるのはいけません。文学、歴史、地理、政治のいずれも学ばなければなりません。

実は、この試合でいい成績を取れるために、本をたくさん読みました。試合にはそれほど役立たなかったのですが、私自身、日本に対しての理解がまた一歩前へ進みました。

二日目の決勝戦を私も見ました。予選から勝ち抜いた選手たちが舞台の上で、自信を持ち質問に答える姿に、私は深く感動させられました。「やはり、知識を持つ人間は、かっこいい」と。早押しのボタンを押すスピードも、正解を大きな声で言い出す自信も、受賞した時のお辞儀までは非常に魅力的に見えました。これらを見た時、私は、「自分もいずれ、わが校を代表し知識大会の舞台に立って優勝してみせる」と情熱が湧き出していました。

**南京航空航天　　顧紅娟（原文日本語）**

「笹川杯」に参加したのは、つい三日前のことだ。十月の始め、先生がクラス全員にこのクイズ大会のことを教えてくれた。

十月の中旬に、この大会のための選抜テストがあった。日本語学科の学生全員がうちの学校の代表になり、この大会に参加するためにいろいろな準備をした。幸い、私は記憶力が大変良いので、筆記テストでは最高得点を取ることができた。おそらく（多分）私は選手に選ばれるだろうと思った。しかし、実は先生は私を選ぶかどうかを迷っていた。なぜかというと（なぜなら）私は内気な性格で人前に立つのが恥ずかしいからだ。先生は慎重に考え、その結果、私を選手に選ぶという、このありがたい機会を私に与えてくれた。そして先生は「あなたは内向的な性格だけど、強い人の間にいれば気を強く持てるでしょう」と私を励ましてくれた。これには本当に感動した。

そして、私と先輩たちは「笹川杯」の用意をし始めた。最初はどうしたらいいのか全然分からなかった。日本についての知識問題がたくさんあったので、ひたすら暗記していっても全然足りないと思った。先生は資料を豊富に集めて私たちに配ってくれた。また、週一回、選手全員が事務室に集まり、例年の問題に答え、覚えた知識内容を改めて整理した。いつの間にか一ヶ月が過ぎていた。そうして私たちは「笹川杯」を迎えた。

「笹川杯」は中日友好を深めるために開催された。私たち日本語を勉強する学生が中日友好の架け橋になるのは当然のことだ。

北京大学に着き、約９０の学校からの優秀な選手を見て、ちょっと心細くなった。勝ち負けは気にせず、ただこの戦いの過程を楽しもう、と先輩たちとお互いに慰め合った。

気持ちを落ち着けて、私たちは競技場に上がった。そこには誰も私のことを知る人はいないし、そばに先輩が立っていたこともあって、不思議と私は全然緊張しなかった。決勝には残れなかったが、よい鍛錬となった。

私にとってこの大会は、貴重な体験として心の奥深くに刻み込まれた。私たちは中日友好の重い責任を担っているので、これからも中日関係の改善のために一生懸命勉強して、頑張っていこうと思う。

**吉林大学珠海学院日本語研究室教員（原文中国語）**

日本科学協会と北京大学の主催による 2014 年笹川杯大学生日本知識クイズ全国大会が 11 月 23 日に北京大学の英傑交流センターで行われました。勤務先である吉林大学珠海学院が主催者から招待を受け、史上最大規模でレベルも最高の全国大会に参加して、北京大学、清華大学、復旦大学、南京大学、上海外国語大学など国内 88 大学との競技に臨めたことは誇りです。また光栄なことに、学院勤務の日本語教員としてチームを引率して北京大会に参加し、国立大学の同業諸兄に学びを請うことができ、三流大学の学生の活躍を率いることができたのはこの上ない喜びです。

このような交流学習の場を築いてくださった主催者の皆様、親切で連絡に奔走してくださった日本科学協会の顧文君先生、多くの面で支えてくれた学院の図書館や教務部門に感謝しております。勤務先が独立学院として大会に招待されたため、独立学院の引率教員の一人として参加することができました。

ここ数年来中国の高等教育がエリート化から大衆向きに転換する過程で、独立学院が新たな存在として気運に乗じて生まれたことは広く知られております。突然新たに現れた多くの独立学院は学生募集の規模、施設の条件などの面ですべて公立の諸大学を上回っており、人材育成の面でも応用性、開放性、融通性、国際化などの特徴を明らかに示してきました。しかし残念なことに、独立学院は公立の諸大学と同じように社会のため貢献者や専門人材を育成しているにもかかわらず差別や不公平な待遇を受けています。例えば、全国レベルの中華日本語スピーチ大会、省地区レベルのスピーチコンテストなどにはほぼ独立学院の姿がありません。その原因を突き詰めると、独立学院が中国の教育体制の中でとてもばつが悪い立場にあるためです。社会の多くの人から色眼鏡で見られ、独立学院の入学生は劣っており、レベルが低く、能力が弱いと思われています。確かに独立学院の学生はさまざまな理由によって入試成績は公立校に及ばないものでしたが、だからといって彼らのすべてを否定し恒久的に劣等生のレッテルを貼ってはいけません。二千年以上も昔の中国の大教育家、孔子は『論語・衛霊公』の中で「誰にでも教え差別をしない」と述べられています。世の中のいかなる人でも、貧富、善悪、知恵の優劣、善悪などの別なく、すべて平等に教育を受ける権利があるということです。また近代日本の著名な啓蒙思想家、福沢諭吉も『学問のすゝめ』の第一章で「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と指摘しています。今まで、当学院の学生に才気を発揮する舞台がないのが大きな悩みでした。彼らの冷めた目で見られるのが不満だったのです。したがって今回クイズ大会にご招待頂いて一番の収穫は感動でした。一番に申し上げたいのは感謝です。

招待を受けてから指導部は本件を重視しており、日本語研究室が積極的に行動を起こして参加準備を真剣に進めました。今回大会のテーマと出題範囲や分野の幅広さを考慮し、日本語研究室では日本人教員のいる優位を十分に活かして、教員の研究方針および授業科目に基づいて、文学、文化、歴史、政治（法律、制度などを含む）、社会、娯楽（音楽、映画、テレビ、アニメ、マンガ、ゲームなどを含む）、スポーツなどに分かれて出題の研究、資料の準備、分野別指導を行いました。同時に、一次審査、筆記試験、総合的考慮など多くのプロセスを経て選抜試験を行い、日本語専攻の 2011 年度入学生から江凱麗、王怡然、2012 年度入学生から李梓栄が本学院の代表として北京大会に参加することになりました。10 月の国慶節（建国記念日）連休後から大会前日まで、日本語研究室の複数の教員が大会参加者に強化指導を行いました。

今回の北京大会参加には波瀾もありました。11 月初めに切符を手配しようとしたところ、空席が少なかったせいでしょうが広州から北京へ直通の寝台車指定券が取れず、石家荘で乗り換える便を取るしかありませんでした。11 月 20 日の早朝バスで学院から 3 時間かけ広州に向かい、広州駅から石家荘行きの汽車に 19 時間揺られ、石家荘で 3 時間半の待ち合わせを挟んで北京西駅行きに乗り換え 2 時間余り。

21 日の晩、現場での抽選により、本学院の代表チームは山東大学、北京語言大学、南京航空航天大学、遼寧師範大学の 4 大学の代表チームと同じ舞台で競うことに決まりました。大会は 22 日午前 9 時 45 分の定刻に始まり、個人と団体の必須回答ラウンドでは 5 チームとも各自の優れた実力を見せ、スコアは

追いつ追われつで、現場の空気は凝結し、緊張した雰囲気に包まれました。後半戦の早押しラウンドでは、山東大学が豊富な知識量と戦略的な回答技術で首位に立ちました。

本学院の代表は決勝戦に進めませんでしたが、今大会での収穫は非常に多く、意義は重大です。参加した学生にとっては、他大学の強敵との全力勝負に努力を注ぎ込み、喜びを分かち合い、友情を手に入れ、自信を増すことができた経験は人生でも忘れがたい貴重な宝になるでしょう。私にとっては、今回の北京の旅は聖地を巡礼してよい経験を学ぶ学習の旅であり、文をもって交わりを結ぶ交流の旅でもありました。視野が広がり、経験を積むことができましたが、他大学との開きを見られたことは重要です。今後の学科構成や教育改革に多くの啓発と構想が得られました。

「路は漫々として其れ修遠なり、吾 将に上下して求索せんとす」という屈原の言葉があります。開設されて間もない専攻の我々は、日本語人材育成の難関でよちよち歩いている子供のようなもので、第一歩を踏み出したばかりだとは深く分かっています。しかし祖国の現代化のため優れた日本語専門人材を養成し、日中両国の友好交流のため実践人材を養成するという信念はこの上なく固いものです。我々の成長する道で橋を架けて下さる親切な人、燃料を補給してくれる公益機関の存在のおかげで、そして無数の善良なる中日両国民からの期待も集まっています。

奮い立って前進することを促し成長を後押ししてくれた 2014 年「笹川杯」に感謝しております。

**北京林業大学　学生記者：崔詩雪**

**初冬の桜**

**2014 年笹川杯大学生日本知識クイズ全国大会決勝戦　報道部傍聴記（原文中国語）**

2014 年 11 月 23 日、ちょうど訪れた冬の寒さの中、ある特別な大会が北京大学の英傑交流センターで行われました。日本財団の特別賛助により北京大学と日本科学協会が共同で開催したものです。笹川杯大学生日本知識クイズ全国大会は、目新しくもない名前ながら十年も続いて開かれてきました。今年は笹川杯大学生日本知識クイズ全国大会が十周年を迎え、この記念すべき年に笹川杯は遂に中国の最高学府である北京大学にやって来たのです。今大会でも往時の輝きはそのままでした。

初冬が訪れたばかりの北京には秋の彩りがいくらか残っており、和服をまとった日本人は間違いなく冬のキャンパスで最も人目をひく景色になっていました。文化を包容し、積極的に学ぶ……こうした和の言葉は日本知識クイズ大会の支柱ともなっています。全国各地の大学生が北京大学に集まり、大会を通じて交流と友情を深めました。

首都大学メディア連盟の学生記者として今大会の報道部に参加できたことを幸いに思っています。

23 日早朝、北京大学の李岩松副学長、日本財団の尾形武寿理事長、日本科学協会の大島美恵子会長を始めとする大会指導部全員が、今大会に参加した学生達と英傑交流センター前で記念撮影を行いました。寒風が吹き渡る中、正装の学生達は歯が鳴るほど凍えていましたが、一番すばらしい記念写真にしようと、素敵な微笑みと気品を保ち世界に中国の大学生の誇らしい姿を見せるべく努力していました。

北京大学の李岩松副校長は開幕式の挨拶の中で、感動を込めて次のように述べました。「笹川杯大学生日本知識クイズ全国大会は中日青年を結ぶ双方向の質が高い舞台となっており、二国間の民間交流ルートとしてレベルの高いものです。日本財団が長い間にわたり中日両国間の理解と友情のため、北京大学の教育事業に重要な貢献をしてきてくださったことに北京大学は感謝しております。北京大学は引き続き日本財団、日本科学協会と手を携えて、若い人材の育成のため、中日両国を繁栄・発展させるため共に努力していきます。」その後、日本財団の尾形武寿理事長、日本科学協会の大島美恵子会長からもそれぞれ講話があり、今回のイベントに対する期待と中日の青年の友好的な往来に対する希望を話されました。

大会の正式開始前に、私達は学生報道部としてたくさんのメディアと共に会場そばのホールに招かれ、尾形理事長と大島会長の記者会見に参加しました。スマートな尾形理事長と優雅で雰囲気のある大島会長に対し、学生記者達は積極的に先を争って今大会に関するさまざまな質問をしました。尾形理事長と大島会長から面白くてユーモアのある回答を頂くたび、会見場から拍手が湧き起こっていました。学生記者が単刀直入に「中日関係を発展させるうえで現在最大の障害は何だとお考えでしょうか」と質問すると、尾形理事長は避けて通らず率直に自らの考えを述べられました。「中日関係の未来は期待に満ちた方向になると思っています。どうして中国と日本に今憎しみがあるのかというと、原因の大部分は相互の不理解に基づくものです。皆さん中国の学生が日本の若い人の生活、日本の文化を理解しないのと同じように、日本の学生も中国の若い人の生活を理解していません。お互いの印象の大部分はニュース、映画、テレビ、出版作品によるものですが、得てして芸術を通じて誇張されたものです。」尾形理事長はまた、「私は中日交流活動に従事して 30 年余りになります。初めて中国に来たのは 1980 年代だったと覚えています。ここ数年で中国は大きく変化していますが、より多くの中国の若者が日本と日本文化に対して興味を持ってくれるようにと望んでいます。実際、ここ数年してきている活動は中日青年の交流促進事業です」とも述べられました。大島会長もご自身の期待を述べられました。中国がここ数年の急激な発展で遭遇した問題の多く（スモッグなど）は日本が経験してきたものだとお考えで、日本科学的協会の会長として、日本の経験を中国と共有し、日本発の技術によるサポートを提供したいとのことです。

学生記者達からの質問はまだたくさんありましたが、時間が限られており、また大会も白熱化した段階まで進んでいたため、この印象深い記者会見はやむなく終了となりました。

大会の会場に戻ると、ちょうど団体の決勝戦が行われていました。さまざまな意地の悪い問題や奇怪な問題を相手に、各大学の選手達は大いに才能を発揮して、次から次へと奥義を繰り出しての大接戦となりました。最後の栄冠は北京大学と洛陽外国語大学の 2 チームいずれかというところまで固まり、場内はぴりぴりとした雰囲気に包まれました。最後の早押し問題では、誰が回答権を奪取するのかを場の全員が息を殺して見守っていました。最後の回答権を獲得したのは意外にも南京工業大学の選手でした。その瞬間に結果が決まり、洛陽外国語大学が 5 点差で北京大学を抑えて今大会の団体戦チャンピオンに輝きました。

大会の終了後、すぐに授賞式が行われました。団体戦の上位 3 チームは洛陽外国語学院、北京大学、南京工業大学が獲得し、東華大学の馬羽潔選手ら 6 人が個人戦の上位 3 名を獲得しました。今回の受賞者は全員 8 日間の訪日学習活動に招待されます。閉会式では李岩松副学長、尾形理事長、大島会長からそれぞれ講話がありました。来賓の日本の木寺昌人・駐中国大使も受賞者への祝辞とこのイベントへの賛意を述べられました。中日関係が緊張しだしてから初めて日本の駐中国大使が出席した公的イベントだとのことです。

授賞式が終わるともうお昼にさしかかっており、北京大学農園レストランで主催の北京大学から全参加者に美味しい昼食がふるまわれました。

大会も顔ぶれも忘れがたいものになりました。笹川杯大学生日本知識クイズ全国大会はすでに閉幕しましたが、遥か遠い日本からの友情はとこしえに生き、時を経ていっそう新たなものとなるでしょう。11 月は初冬であり、日本でも桜の咲く季節ではありません。しかし桜は冬の厳しい寒さを経験してこそ春に甘い芳香を放つことができるのです。中国と日本の関係もそうです。「冬来たりなば、春遠からじ」という句を引いて結びにします。